

令和7年4月15日

令和6年度日本芸術院賞授賞者の決定について

(日本芸術院賞10名、重ねて恩賜賞3名)

日本芸術院(院長 野村萬)は、日本芸術院賞授賞者10名(うち、3名に対し重ねて恩賜賞授賞)を決定いたしましたので、お知らせします。

1. 日本芸術院賞の授賞について

日本芸術院は、毎年、卓越した芸術作品又は芸術の進歩に貢献する顕著な業績があると認められる者に対して恩賜賞・日本芸術院賞の授賞を行っています。

日本芸術院の授賞制度は、昭和16年度に日本芸術院賞、昭和24年度に恩賜賞が創設され、令和6年度で81回目の授賞となります。

2. 授賞者について(授賞者の授賞理由及び略歴(本人確認済)等は別添資料を御覧ください。)

【第一部(美術)】※「日本芸術院賞」は分科、分科内の五十音順

恩賜賞・日本芸術院賞	勝野	眞言	
日本芸術院賞	小杉	小二郎	
日本芸術院賞	西田	眞人	
日本芸術院賞	武腰	一憲	
日本芸術院賞	日比野	博鳳	(本名: 日比野 実)

【第二部(文芸)】

恩賜賞・日本芸術院賞	川上	弘美	
日本芸術院賞	長谷川	權	(本名: 長谷川 隆喜)

【第三部(音楽・演劇・舞踊)】

恩賜賞・日本芸術院賞	吉田	和生	(本名: 荻野 恒利)
日本芸術院賞	梅若	紀彰	(本名: 梅若 慎也)
日本芸術院賞	尾上	松緑	(本名: 藤間 あらし)

3. 授賞式について

令和7年6月24日(火)に日本芸術院会館(東京都台東区)において行う予定です。

※今後の調整により変更となる可能性もあります。

<担当>

日本芸術院

事務長 植垣 健一

庶務係長 鈴木 啓太

電話 03-3821-7191

彫刻

かつ の ま こと
勝 野 眞 言



職名（肩書き） 彫刻家

昭和29年2月25日 長野県生まれ 71歳

授賞対象

「^{はす}蓮」（令和6年第11回日展出品作）に対し

授賞理由

勝野眞言氏は、長年にわたり自然観察から得られる“実感”を造形に結実させてきた作家である。第11回日展（令和6年）にて発表された裸婦彫刻「蓮」は、まさに勝野芸術の集大成といえる秀作である。勝野氏は学生時代、昭和を代表する彫刻家清水多嘉示、そして木下繁の影響を強く受け、以来、一貫して「人」を表現の中心に置きながらも、その手法と素材に限りなく自由を求め、深化させてきた。具象彫刻の厳しさと可能性を追求し続けるその姿勢は、次代の模範となるものである。

【略歴】

昭和53年 武蔵野美術大学大学院造形研究科美術専攻彫刻コース修了

平成18年 崇城大学芸術学部美術学科教授（同26年学科長、令和3年学部長、令和5年名誉教授）

令和4年 日本彫刻会監事（同6年理事、現在まで）

令和6年 ビオトピア財団顧問（現在まで）

【賞歴】

昭和62年 日展特選（後1回）

平成9年 昭和会展優秀賞

平成12年 日本現代陶彫展2000銀賞

平成14年 白日会展吉田賞

平成17年 日彫展西望賞

令和元年 日展文部科学大臣賞

令和2年 熊本県文化懇話会賞

令和3年 南木曾町特別表彰

絵画

こ すぎ こ じ ろう
小 杉 小 二 郎

職名（肩書き） 洋画家

昭和19年2月27日 東京都生まれ 81歳



授賞対象

「トスカーナの窓辺^{まどべ}」（令和6年）に対し

授賞理由

小杉小二郎氏はまるで時が止まったかのように、考えるより先に地面に絵を描き続けるような少年だったように想像できる。その少年の眼差しで日々彼なりのモチーフを発見し新しい絵作りをしている画家である。パリに数十年住んでいたこの画家は古い楽器や玩具など、人間のぬくもりのあるモチーフを好んで描き続けている。自然とパリの空気が本人になっている。画面のどこにも気張ったところが無く、単純で透徹。小杉氏の絵画精神は孤独な表情が濃い、単純化した画面にはひそやかにゆっくりとしたぬくもりと洗練を不思議と感じる。そのなつかしさに共感を覚える人が多い。

【略歴】

- 昭和41年 日本大学工業デザイン科卒業
- 昭和45年 渡仏（平成16年まで）
- 昭和45年 グラン・ド・ショミエール研究所入学
- 昭和48年 フランス国家文化省作品買上
- 平成3年 朝日新聞社主催 個展開催
- 平成17年 日本経済新聞社主催 個展開催
- 令和元年 公益財団法人池田二十世紀美術館理事（現在まで）

【賞歴】

- 昭和48年 サロン・デ・ナショナル・ボザール フラマン賞
- 昭和59年 日本青年画家展優秀賞（後1回）
- 平成元年 前田寛治大賞展佳作賞
- 平成4年 公益信託タカシマヤ文化基金新鋭作家奨励賞
- 平成18年 損保ジャパン東郷青児美術館大賞

絵画

にし だ まさ と
西 田 眞 人



職名（肩書き） 日本画家

昭和27年8月8日 兵庫県生まれ 72歳

授賞対象

「^{まつ}祠る」（令和6年第11回日展出品作）に対し

授賞理由

西田眞人氏は、日本画素材において、相反する性質である水と岩絵の具から生まれる現象を生かしながら、精密描写に触覚的な要素を加味し、神戸の風景や、イギリスで取材したノスタルジックな画題を展開してきた。近年は、具象と抽象を混在させることで、より造形的な方向を目指しており、本作品「祠る」では細密な描写と動性のある墨の効果をバランスよく表現している。繊細さと大胆さを併せ持った、詩情豊かな画面を創り上げることに成功した秀作である。

【略歴】

昭和53年 京都市立芸術大学美術学部日本画科卒業
平成 5年 青塔社に入塾 池田道夫に師事
平成20年 京都市立芸術大学美術学部教授（同30年まで）
平成30年 大阪芸術大学客員教授（現在まで）

【賞歴】

平成 7年 日展特選（後1回）、文化庁買い上げ
平成 9年 山種美術館賞展優秀賞
平成17年 菅楯彦大賞展大賞
平成19年 兵庫県文化賞
平成20年 神戸市文化賞
平成28年 日展日展会員賞
令和 5年 日展内閣総理大臣賞
令和 6年 神戸新聞文化賞

工芸

たけ ごし かず のり
武 腰 一 憲



職名（肩書き） 工芸家

昭和31年10月26日 石川県生まれ 68歳

授賞対象

「^{つき}月の^{うつわ}器・^{きろ}帰路」（令和6年第11回日展出品作）に対し

授賞理由

武腰一憲氏は美術大学卒業後、九谷焼の世界で当初は陶造形作品を展覧会に発表し続けていたが、しだいに陶土より磁器土へと幅を広げていった。30年程前にシルクロードのオアシス都市への取材旅行をきっかけに現地の悠久とした時間や空間に感動し作品のテーマとしてきた。又、人々が身に纏う民族衣装にも目を奪われ特に現地のサマルカンドブルーといわれるブルーと九谷焼の艶のある色との組み合わせの効果をねらいシリーズ作品として発表し続けてきた。その内で受賞作品は武腰氏独自の世界観も表現されており特に優れた作品である。

【略歴】

昭和54年 金沢美術工芸大学美術工芸学部産業美術学科工芸デザイン専攻卒業

昭和55年 日展初入選

昭和56年 日本現代工芸美術展初入選

平成18年 現代工芸美術家協会理事（現在まで）

平成25年 日展評議員（同26年まで）

【賞歴】

昭和61年 石川県工芸美術展大賞

平成 7年 伝統九谷焼工芸展大賞

平成 9年 日展特選（後1回）

平成26年 日本現代工芸美術展文部科学大臣賞

平成31年 日本現代工芸美術展内閣総理大臣賞

令和 5年 日展東京都知事賞

令和 6年 日展内閣総理大臣賞

書

ひ び の はく ほう
日 比 野 博 鳳

(本名 ひ び の みのる
日比野 実)



職名 (肩書き) 書家

昭和35年3月1日 京都府生まれ 65歳

授賞対象

「^{はる}春への^{うつ}移ろい」(令和6年第11回日展出品作)に対し

授賞理由

日比野博鳳氏は日本古来より伝わる“かな書”の姿や風姿を基調にし、祖父日比野五鳳や父光鳳の書芸や芸術性により現代性を加味した書風を確立。今回の受賞作は越前和紙に金箔が引かれた加工紙に、寸松庵色紙(平安の古筆)をベースに連綿を多用した作品構成は往年のみやこ人の姿を連想させる秀作である。また、日比野氏は長く書道の教員として、中国における漢字の成立から各書体の名品を研究し、かな書にとどまることなく広く書の世界を見渡しながら後進の育成にも力を注いでいる。

【略歴】

昭和58年 同志社大学文学部文化学科卒業
平成4年 同志社大学文学部講師(現在まで)
平成26年 花園大学文学部教授(現在まで)
平成29年 水穂会会長(現在まで)

【賞歴】

平成5年 読売新聞社賞(後1回)
平成29年 日展東京都知事賞
令和3年 日展文部科学大臣賞

小説

かわ かみ ひろ み
川 上 弘 美

職名（肩書き） 小説家

昭和33年4月1日 東京都生まれ 67歳



（©講談社／森清）

授賞対象

「センセイの靴」「真鶴」など小説を中心とする傑出した文学的業績に対し

授賞理由

川上弘美氏の文学（小説）は、「万葉」「源氏物語」から始まる日本語文学固有の情感豊かな世界と、ヨーロッパ近代文学を中心とするモダニズムを巧みに融合させ、他の追随を許さない。川上氏は平成8年、「蛇を踏む」で芥川龍之介賞受賞以来、次々と話題作、秀作を発表し、谷崎潤一郎賞、芸術選奨文部科学大臣賞、読売文学賞など国内の大きな文学賞を受賞。更に海外でも多くの作品が翻訳刊行されている。現在は無論、これからの日本文学を支える柱となる大きな存在である。

【略歴】

昭和55年 お茶の水女子大学理学部生物学科卒業
平成18年 谷崎潤一郎賞選考委員（現在まで）
平成19年 芥川龍之介賞選考委員（現在まで）
平成28年 読売文学賞選考委員（現在まで）

【賞歴】

平成 6年 パスカル短篇文学新人賞
平成 8年 芥川龍之介賞
平成13年 谷崎潤一郎賞
平成19年 芸術選奨文部科学大臣賞
平成27年 読売文学賞小説賞
令和 元年 紫綬褒章
令和 5年 フランス芸術文化勲章オフィシエ
令和 5年 野間文芸賞

俳句

は せ がわ かい
長 谷 川 権
(本名 長谷川 隆喜)



職名（肩書き） 俳人

昭和29年2月20日 熊本県生まれ 71歳

授賞対象

「虚空」「松島」など多くの優れた句集と俳論を含む文化論、エッセイなどの多彩な業績に対し

授賞理由

芭蕉以来、俳諧俳句は日本文学の重要な一翼を担って来た。それは江戸以降、明治、大正、昭和の時代を見ても明らかなことである。さらに俳句は今や、国際的な短詩型文学として世界の注目を浴びつつある。その俳句表現活動の中心にいる一人が長谷川権氏である。長谷川氏は句集「虚空」で読売文学賞を受賞したが、俳論・批評にもすぐれ、「俳句の宇宙」でサントリー学芸賞を受けている。俳人として、創作と批評の両面にわたって優れた業績を持つ人は数少ない。その意味からしても、貴重な存在である。

【略歴】

昭和51年 東京大学法学部卒業

昭和53年 読売新聞社入社（平成12年退社）

平成 元年 飴山實に師事

平成 4年 東海大学文芸創作学科特任教授（平成31年まで）

平成 5年 「古志」主宰（同22年まで）

平成12年 朝日新聞俳壇選者（現在まで）

平成19年 (財)神奈川文学振興会評議員（同23年理事、同24年副理事長、現在まで ※同23年公益財団法人へ移行）

平成20年 インターネット歳時記「きごさい」代表（現在まで）

平成24年 奥の細道文学賞最終選考委員（現在まで）

平成24年 ドナルド・キーン賞最終選考委員（現在まで）

【賞歴】

平成 2年 サントリー学芸賞芸術・文学部門

平成15年 読売文学賞詩歌俳句賞

文楽

よし だ かず お
吉 田 和 生

(本名 おぎの つねとし
萩野 恒利)



職名（肩書き） 文楽人形遣い

昭和22年7月28日 愛媛県生まれ 77歳

授賞対象

長年にわたる文楽の普及・発展並びに文楽人形遣いとしての顕著な業績に対し

授賞理由

吉田和生氏は、文楽かしら制作の名人大江巳之助氏の勧めにより吉田文雀に入門、研鑽を積む。沈静で的確な芸風で時代物の武家の女房や御殿女中などを得意としている。また国立文楽劇場の人形の首は約80種300点程有るが、公演毎にかしらを定める「かしら割委員」も平成27年からつとめ、表現者としてだけでなく、人形浄瑠璃文楽の根幹を支える重責を担っている。

「伽羅先代萩」の乳人政岡、「妹背山婦女庭訓」の後室定高など、立女方の役々を中心に演じるその芸は後進の範となり、今の文楽界にとって重要な存在でありその功績は多大である。

【略歴】

昭和42年 吉田文雀に入門、吉田和生と名乗る

昭和43年 「壇浦兜軍記」水奴にて初舞台

平成29年 重要無形文化財「人形浄瑠璃文楽人形」（各個認定）保持者

令和6年 文化功労者

【賞歴】

平成3年 文楽協会賞

平成4年 国立劇場文楽賞文楽奨励賞

平成18年 国立劇場文楽賞文楽優秀賞

平成26年 芸術選奨文部科学大臣賞

平成27年 国立劇場文楽賞文楽大賞

平成29年 大阪文化祭賞優秀賞

平成29年 愛顔のえひめ文化・スポーツ賞『文化特別功労賞』

令和元年 旭日小綬章

能楽

うめ わか き しょう
梅 若 紀 彰

(本名 うめわか しんや
梅若 慎也)



職名（肩書き） 能楽師

昭和31年9月18日 東京都生まれ 68歳

授賞対象

能「山姥 雪月花之舞」・能「松風 見留」を始めとした優れた舞台成果に対し

授賞理由

梅若紀彰氏は、祖父に五十五世梅若六郎、叔父に梅若実桜雪を持つという恵まれた立場に安住せず、修行時代より無私の心で一途に稽古、精進を重ねた。特に「山姥 雪月花之舞」では曲の主眼でもある雄大なスケールを描き出し、また「松風 見留」では緻密丁寧に幽玄の世界を格調高く作り上げた。梅若家当主・実桜雪の長期にわたる体調不良の現在、影の存在である地頭を勤めて一門をまとめる重責を果たしながら、たびたびの代演では「姨捨」等の大曲をも見事に演じて観客を感嘆させている。

【略歴】

- 昭和35年 「鞍馬天狗」花見にて初舞台
- 昭和43年 「小袖曾我」五郎にて初シテ
- 昭和49年 暁星高等学校卒業
- 昭和49年 五十五世梅若六郎及び現梅若実桜雪に師事
- 平成4年 梅若会理事（同25年まで、同10年監査、同26年評議員、現在まで）
- 平成10年 重要無形文化財「能楽」（総合認定）保持者
- 平成22年 梅若晋矢改め二世梅若紀彰襲名
- 令和4年 梅若実文庫理事（現在まで）

【賞歴】

- 令和4年 横浜文化賞文化・芸術部門芸術分野

歌舞伎・日本舞踊

お の え し ょ う ろ く
尾 上 松 緑

(本名 藤間 あらし)



職名 (肩書き) 歌舞伎俳優・日本舞踊家

昭和50年2月5日 東京都生まれ 50歳

授賞対象

最近の活躍、特に「妹背山婦女庭訓」の大判事、新作歌舞伎「荒川十太夫」の成果に対し

授賞理由

四代目尾上松緑氏は、若くして父初代尾上辰之助、祖父二代目尾上松緑を亡くしたあとは、菊五郎劇団に所属し七代目尾上菊五郎の元で修業を重ねた。最近その成果が表れ、古典の数々の大役を勤め特に老け役の中で最も難しいといわれる「妹背山婦女庭訓」の大判事で祖父譲りの古風な芸で成果を残している。また菊五郎系の世話物「髪結新三」「四千両」等で力を発揮している。講談が原作の「荒川十太夫」を新作歌舞伎として演じ成果をだした。これからの歌舞伎界の中心となり、若手を牽引する俳優になり、日本芸術院賞にふさわしい。

【略歴】

- 昭和55年 本名で初御目見得 (国立劇場『戻橋背御撰』怪童丸後に坂田金時)
- 昭和56年 二代目尾上左近を名のり初舞台 (歌舞伎座『極附幡随長兵衛』長松／『親子連枝鶯』怪童丸)
- 平成 元年 日本舞踊藤間流勘右衛門派家元六世藤間勘右衛門を襲名
- 平成 3年 二代目尾上辰之助を襲名
- 平成14年 四代目尾上松緑を襲名
- 平成17年 重要無形文化財「歌舞伎」(総合認定) 保持者

【賞歴】

- 平成10年 眞山青果賞新人賞
- 平成17年 国立劇場賞優秀賞 (後4回)
- 平成22年 花柳壽應賞新人賞 (藤間勘右衛門として)
- 平成26年 松尾芸能賞優秀賞
- 令和 4年 芸術選奨文部科学大臣新人賞

1. 恩賜賞・日本芸術院賞について

(1) 概要

日本芸術院賞は、卓越した芸術作品又は芸術の進歩に貢献する顕著な業績ありと認める者に対して授賞されます。また、恩賜賞は日本芸術院賞の中から、第一部から第三部までの各部1名以内に授賞されます。

本院における授賞制度は、昭和16年度に帝国芸術院賞(昭和22年度から日本芸術院賞)が創設され、恩賜賞は昭和24年度から設けられています。

授賞式は、昭和17年(16年度)から戦中、戦後の一時期を除いて毎年举行され、今回で81回目になります。

昭和25年以降の授賞式には天皇陛下の行幸を、平成2年からは天皇皇后両陛下の行幸啓を仰いで举行されています。

(2) 第1回授賞より今回授賞までの授賞人数

恩賜賞：142名

日本芸術院賞：705名

(3) 選考方法

日本芸術院賞候補の推薦は、毎年度、日本芸術院会員により行われ、全会員で組織する授賞候補者選考委員会において選考します。授賞は、各部の選考、総会による承認をもって授賞候補者を決め、その候補者について、各部における投票を経て総会で承認を得ることにより決定します。

(4) 授与品

恩賜賞：賞状、賜品(御紋付銀花瓶1個)

日本芸術院賞：賞状、賞牌(1人1個)、賞金(1件100万円)

(5) 授賞式

令和7年6月24日(火)に日本芸術院会館(東京都台東区)において行う予定です。

※今後、調整状況により変更となる可能性もあります。

2. 日本芸術院について

(1) 設置目的

日本芸術院は、美術、文芸、音楽、演劇、舞踊等芸術各分野の優れた芸術家を優遇するための荣誉機関として設置されています。

(2) 沿革

日本芸術院は、明治40年6月に文部省美術展覧会(文展)を開催するために設けられた美術審査委員会を母体とし、大正8年9月に「帝国美術院」として創設されました。その後、昭和12年6月に美術のほかに文芸、音楽、演劇、舞踊の分野を加え「帝国芸術院」に改組されるなどの拡充を経て、昭和22年12月に「日本芸術院」と名称を変更し、今日に至っています。

(3) 組織

日本芸術院は、院長1名と会員(終身)120名以内で構成され、会則により3部18分科に分かれ所属し、本院の設置目的を達するため必要な事業を行います。

院長は、芸術に関し卓越した識見を有する者について、会員による選挙を経て、総会の承認を得ることにより決定し、文部科学大臣により任命されます。

会員は、外部有識者で組織する推薦委員会及び会員による推薦、会員と外部有識者で組織する選考委員会による絞込み、会員による選挙を経て、総会の承認を得ることにより決定し、文部科学大臣により任命されます。

第一部 「美術」	第 1分科 第 2分科 第 3分科 第 4分科 第 5分科 第 6分科	絵画 彫刻 工芸 書 建築・デザイン 写真・映像
第二部 「文芸」	第 7分科 第 8分科 第 9分科 第10分科	小説・戯曲 詩歌 評論・翻訳 マンガ
第三部 「音楽・演劇・舞踊」	第11分科 第12分科 第13分科 第14分科 第15分科 第16分科 第17分科 第18分科	能楽 歌舞伎 文楽 邦楽 洋楽 舞踊 演劇 映画 ※アニメーションや放送、脚本を含む

(4) 主な事業

- ① 芸術の発達に寄与する活動を行うとともに、芸術に関する重要事項を審議し、これに関し文部科学大臣又は文化庁長官に意見を述べることができます。
- ② 会員以外の者で、卓越した芸術作品と認められるものを制作した者及び芸術の進歩に貢献する顕著な業績があると認められる者に対して、毎年、恩賜賞と日本芸術院賞を授賞しています。
- ③ 前記の他、恩賜賞・日本芸術院賞受賞作品展(無料)、会員講演会等の開催(無料)、日本芸術院会員記録の制作、日本芸術院の活動記録作製等を行っています。

3. 関係法規 (抄)

(1) 日本芸術院令

- 第1条 日本芸術院は、芸術上の功績顕著な芸術家を優遇するための栄誉機関とする。
- 第2条 日本芸術院は、院長1人及び会員120人以内で組織する。

(2) 日本芸術院会則

- 第4条 日本芸術院は、卓越した芸術作品と認められるものを制作した者及び芸術の進歩に貢献する顕著な業績ありと認める者に対して賞を授ける。

(3) 日本芸術院授賞規則

- 第1条 日本芸術院は、卓越した芸術作品、又は芸術の進歩に貢献する顕著な業績ありと認める者に対して授賞する。
- 第2条 賞は恩賜賞及び日本芸術院賞とする。
- 2 恩賜賞は、毎年各部1個以内とし、当該年度の日本芸術院賞中よりこれを推薦するものとする。
- 第3条 恩賜賞は、賜品とする。
- 2 日本芸術院賞は、賞牌、賞状及び賞金とする。